

浅草公園

——或シナリオ——

芥川龍之介



1

浅草あざくさの仁王門におうもんの中に吊つつた、火のともらない大提灯おおじょうちん。提灯は次第ざつどうに上へあがり、雑沓ざつどうした仲店なかみせを見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失せない。門の前に飛びかう無数の鳩はと。

2

雷門かみなりもんから縦に見た仲店。正面にはるかに仁王門が見える。樹木は皆枯れ木ばかり。

3

仲店の片側^{かたがわ}。外套^{がいとう}を着た男が一人^{ひとり}、十二三歳の少年と一しよにぶらぶら仲店を歩いてゐる。少年は父親の手を離れ、時々玩具屋^{おもちゃや}の前に立ち止まったりする。父親は勿論こう云う少年を時々叱つたりしないことはない。が、稀^{まれ}には彼自身も少年のいることを忘れたように帽子屋^{ぼうしや}の飾り窓などを眺めてゐる。

4

こう云う親子の上半身^{じょうはんしん}。父親はいかにも田舎者^{いなかもの}らしい、
 無精髭^{ぶしようひげ}を伸ばした男。少年は可愛^{かわい}いと云うよりもむしろ可憐な顔^{うし}をしてゐる。彼等の後ろ^{うし}には雑沓した仲店。彼等はこちらへ歩いて来る。

5

斜めに見たある玩具屋おもちゃやの店。少年はこの店の前に佇たたずんだま
ま、綱のぼを上おつたり下りたりする玩具の猿を眺めている。玩具
屋の店の中には誰も見えない。少年の姿は膝の上まで。

6

綱を上つたり下りたりしている猿。猿は燕尾服えんびふくの尾を垂れ
た上、シルク・ハットあおむを仰向けにかぶっている。この綱や猿
の後ろは深い暗のあるばかり。

この玩具屋のある仲店の片側。猿を見ていた少年は急に父親のいないことに気がつき、きよろきよろあたりを見まわしはじめる。それから向うに何か見つけ、その方へ一散いっさんに走つて行く。

父親らしい男の後ろ姿。ただしこれも膝の上まで。少年はこの男に追いつき、しつかりと外套の袖を捉とらえる。驚いてふり返った男の顔は生憎あいにくいなかもの田舎者らしい父親ではない。綺麗きれに口髭くちひげの手入れをした、都会人らしい紳士である。少年の顔に

往来する失望や当惑に満ちた表情。紳士は少年を残したまま、さっさと向うへ行つてしまふ。少年は遠い雷門かみなりもんを後ろにぼんやり一人佇んでいる。

9

もう一度父親らしい後ろ姿。ただし今度は上半身じょうはんしん。少年はこの男に追いついて恐る恐るその顔を見上げる。彼等の向うには仁王門におうもん。

10

この男の前を向いた顔。彼は、マスクに口を蔽おおつた、人間よ

りも、動物に近い顔をしている。何か悪意の感ぜられる微笑^{びしょう}。

11^二

仲店の片側。少年はこの男を見送つたまま、途方^{とほう}に暮れたように佇んでいる。父親の姿はどちらを眺めても、生憎^{あいにく}目にははいらぬらしい。少年はちよつと考えた後^{のち}、当^{あて}どもなしに歩きはじめる。いずれも洋装をした少女が二人、彼をふり返つたのも知らないように。

12^三

めがね
目金屋の店の飾り窓。

きんがんきよう
近眼鏡、

えんがんきよう
遠眼鏡、

そうがんきよう
双眼鏡、

かくだいきよう
廓大鏡、

顕微鏡、塵除け目金などの並んだ中に西洋人の人形の首が一つ、目金をかけて頬笑んでいる。その窓の前に佇んだ少年の後姿。ただし斜めに後ろから見た上半身。人形の首はおのずから人間の首に変わってしまう。のみならずこう少年に話しかける。——

13 四

「目金を買っておかけなさい。お父さんを見付けるには目金をかけるのに限りますからね。」
「僕の目は病気ではないよ。」

14 五

斜めに見た造花屋（そうかや）の飾り窓。造花は皆竹籠だの、瀬戸物の鉢だのの中に開いている。中でも一番大きいのは左にあるおにゆり（おにゆり）鬼百合の花。飾り窓の板硝子（ガラス）は少年の上半身を映しはじめ。何か幽霊のようにぼんやりと。

15 六

飾り窓の板硝子越しに造花を隔てた少年の上半身。少年は板硝子に手を当てている。そのうちに息の当るせい、顔だけぼんやりと曇ってしまう。

16 七

飾り窓の中の鬼百合の花。ただし後ろは暗である。鬼百合の花の下に垂れている苔つぼみもいつか次第に開きはじめる。

17 八

「わたしの美しさを御覧なさい。」
「だってお前は造花じゃないか？」

18 九

角かどから見た煙草屋の飾り窓。巻煙草の缶かん、葉巻の箱、パイプなどの並んだ中に斜めに札ふだが一枚懸っている。この札に書

いてあるのは、——「煙草の煙は天国の門です。」徐ろおもむにパイ
プから立ち昇のぼる煙。

19 10

煙の満ち充ちた飾り窓の正面しょうめん。少年はこの右に佇たたずんでいる。
ただしこれも膝の上まで。煙の中にはぼんやりと城が三つ浮
かびはじめる。城は Three Castles の商標を立体にしたもの
に近い。

20 11

それ等の城の一つ。この城の門には兵卒が一人銃を持って

佇んでいる。そのまた鉄格子てつこうしの門の向うには棕櫚しゆろが何本もそよいでいる。

21 二三

この城の門の上。そこには横にいつの間まにかこう云う文句が浮かび始める。——

「この門に入るものは英雄となるべし。」

22 二三

こちらへ歩いて来る少年の姿。前の煙草屋の飾り窓は斜めに少年の後ろに立っている。少年はちよつとふり返って見た

後、さつさとまた歩いて行ってしまう。

23

一四

吊り鐘だけ見える鐘楼の内部。撞木は誰かの手に綱を引かれ、徐ろに鐘を鳴らしはじめる。一度、二度、三度、——鐘楼の外は松の木ばかり。

24

一五

斜めに見た射撃屋の店。的は後ろに巻煙草の箱を積み、前に博多人形を並べている。手前に並んだ空気銃の一行。人形の一つはドレスをつけ、扇を持った西洋人の女である。少

年は怯おず怯おずこの店にはいり、空気銃を一つとり上げて全然
 無む分別ぶんべつに的まとを狙ねらう。射撃屋の店には誰もいない。少年の姿は
 膝の上まで。

25

一六

西洋人の女の人形。人形は静かに扇をひろげ、すっかり顔
 を隠してしまふ。それからこの人形に中あたるコルクの弾丸たま。人
 形は勿論仰あ向けおむに倒れる。人形の後ろにも暗のあるばかり。

26

一七

前の射撃屋の店。少年はまた空気銃をとり上げ、今度は熱

心に^{まじ}的を狙う。三発、四発、五発、——しかし^{まじ}的は一つも落ちない。少年は^し渋^しぶ^し渋^しぶ^し銀貨を出し、店の外へ行つてしまふ。

27

一八

始めはただ薄暗い中に四角いものの見えるばかり。その中にこの四角いものは突然電燈をともしたと見え、横にこう云う字を浮かび^{あが}上らせる。——上に「公園六区^{ろっく}」下に「夜警詰所^{やけいづめしよ}」。上のは黒い中に白、下のは黒い中に赤である。

28

一九

劇場の裏の上部。火のともった窓が一つ見える。まっ直^{すぐ}に

雨樋あまどいをおろした壁にはいろいろのポスタアの剥はがれた痕あと。

29 110

この劇場の裏うらの下部かぶ。少年はそこに佇たたずんだまま、しばらくはどちらへも行ゆこうとしない。それから高い窓を見上げる。が、窓には誰も見えない。ただ逞たくましいブルテリアが一匹、少年の足もとを通って行く。少年の匂においを嗅かいで見ながら。

30 111

同じ劇場の裏の上部。火のともった窓には踊り子が一人現れ、冷淡に目の下の往來を眺める。この姿は勿論もちろん逆光線のた

めに顔などははつきりとわからない。が、いつか少年に似た、
可憐かれんな顔を現してしまふ。踊り子は静かに窓をあけ、小さい
花束はなたばを下に投げる。

31
|||

往来に立った少年の足もと。小さい花束が一つ落ちて来る。
少年の手はこれを拾う。花束は往来を離れるが早いか、いつ
か茨いばらの束に変わっている。

32
|||

黒い一枚の掲示けいじ板ばん。掲示板は「北の風、晴」と云う字をチヨ

オクに現している。が、それはぼんやりとなり、「南の風強かるべし。雨模様」と云う字に変わってしまう。

33

二四

ななめ
斜ひょうざつやに見た標札屋ろてんの露店、天幕てんとの下に並んだ見本は徳川家康とくがわいえやす、
二宮尊徳にのみやそんとく、渡辺華山わたなべかせん、近藤勇こんどういさみ、近松門左衛門ちかまつもんざえもんなどの名を並べている。こう云う名前もいつの間まにか有り来りの名前に変つてしまう。のみならずそれ等の標札の向うにかすかに浮んで来る南瓜かぼちやばたけ島……

34

二五

池の向うに並んだ何軒かの映画館。池には勿論電燈の影が幾つともなしに映っている。池の左に立った少年の上半身じょうはんしん。少年の帽は咄嗟とつさの間あいだに風のために池へ飛んでしまう。少年はいろいろあせつた後のち、こちらを向いて歩きはじめる。ほとんど絶望に近い表情。

35 二六

カツフエの飾り窓。砂糖の塔、生菓子なまがし、麦藁むぎわらのパイプを入れた曹達水ソオダスイのコップなどの向うに人かげが幾つも動いている。少年はこの飾り窓の前へ通りかかり、飾り窓の左に足を止めてしまう。少年の姿は膝の上まで。

このカツフェの外部。夫婦らしい中年の男女なんによが二人硝子戸ガラスの中へはいつて行く。女はマントルを着た子供を抱だいている。そのうちにカツフェはおのずからまわり、コック部屋の裏を現わしてしまふ。コック部屋の裏には煙突えんとつが一本。そこにはまた労働者が二人せつせとシャベルを動かしている。カンテラを一つともしたまま。……

テエブルの前の子供椅子いすの上に上半身を見せた前の子供。子供はにこにこ笑いながら、首を振ったり手を挙げたりして

いる。子供の後ろには何も見えない。そこへいつか薔薇の花
が一つずつ静かに落ちはじめる。

38 二九

斜めに見える自動計算器。計算器の前には手が二つしきり
なしに動いている。勿論女の手に違いない。それから絶えず
開かれる抽斗^{ひきだし}。抽斗の中は銭^{ぜに}ばかりである。

39 三〇

前のカツフエの飾り窓。少年の姿も変りはない。しばらく
の^{のち}後、少年は徐^{おもむ}ろに振り返り、足早^{あしはや}にこちらへ歩いて来る。

が、顔ばかりになつた時、ちよつと立ちどまって何かを見る。
多少驚きに近い表情。

40

三三

人だかりのまん中に立つた糶せり商人。あきゆうど彼は呉服ごふくものをひろ
げた中に立ち、一本の帯をふりながら、熱心に人だかりに呼
びかけている。

41

三三

彼の手に持った一本の帯。帯は前後左右に振られながら、
片はしを二三尺現している。帯の模様は廓大かくだいした雪片せつぺん。雪片

は次第にまわりながら、くるくる帯の外へも落ちはじめる。

42

三三三

メリヤス屋の露店^{ろてん}。シャツやズボン下を吊^つった下に婆^{ばあ}さんが一人^{あなか}行火に当っている。婆さんの前にもメリヤス類。毛糸の編みものも交^{まじ}っていないことはない。行火の裾^{すそ}には黒猫が一匹時々前足を嘗^なめている。

43

三四

行火の裾に坐っている黒猫。左に少年の下半身^{かはんしん}も見える。黒猫も始めは変りはない。しかしいつか頭の上に流蘇^{ふさ}の長い

トルコ帽をかぶっている。

44

三五

「坊ちゃん、スウエエタアを一つお買いなさい。」

「僕は帽子さえ買えないんだよ。」

45

三六

メリヤス屋の露店を後ろにした、疲れたらしい少年の上半身。じょうはんしん
少年は涙を流しはじめ。が、やっと気をとり直し、高い空を見上げながら、もう一度こちらへ歩きはじめ。

かすかに星のかがやいた夕空。そこへ大きい顔が一つおのずからぼんやりと浮かんで来る。顔は少年の父親らしい。愛情はこもっているものの、何か無限にも悲しい表情。しかしこの顔もしばらくの後、霧のようにどこかへ消えてしまう。

縦たてに見た往来。少年はこちらへ後ろうしろを見せたまま、この往来を歩いて行く。往来は余り人通りはない。少年の後ろから歩いて行く男。この男はちよつと振り返り、マスクをかけた顔を見せる。少年は一度も後ろを見ない。

斜めに見た格子戸造りの家の外部。家の前には人力車が三台後ろ向きに止まっている。人通りはやはり沢山ない。角隠しをつけた花嫁はなよめが一人、何人かの人々と一しよに格子戸を出、静かに前の人力車に乗る。人力車は三台とも人を乗せると、花嫁を先に走って行く。そのあとから少年の後ろ姿。格子戸の家の前に立った人々は勿論少年に目もやらない。

「XYZ会社特製品、迷い子、文芸的映画」と書いた長方形の

板。これもこの板を前後にしたサンドウィッチ・マンに変わってしまう。サンドウィッチ・マンは年をとっているもの、どこか仲店なかみせを歩いていた、都会人らしい紳士に似ている。後ろは前よりも人通りは多い、いろいろの店の並んだ往来。少年はそこを通りかかり、サンドウィッチ・マンの配くばっている広告を一枚貰って行く。

50 四一

縦に見た前の往来。松葉杖をついた癩兵はいへいが一人ゆつくりと向うへ歩いて行く。癩兵はいつか駝鳥だちように変わっている。が、しばらく歩いて行くうちにまた癩兵になってしまう。横町よこちようの角かどにはポストが一つ。

51 四二

「急げ。急げ。いつ何時死ぬかも知れない。」

52 四三

往来の角かどに立っているポスト。ポストはいつか透明になり、
無数の手紙の折り重なった円筒の内部を現して見せる。が、
見る見る前のようにただのポストに変わってしまう。ポストの
後ろには暗のあるばかり。

53 四四

斜めに見た芸者屋町。お座敷へ出る芸者が二人ある御神燈のともつた格子戸を出、静かにこちらへ歩いて来る。どちらも何の表情も見せない。二人の芸者の通りすぎた後、向うへ歩いて行く少年の姿。少年はちよつとふり返つて見る。前よりもさらに寂しい表情。少年はだんだん小さくなつて行く。そこへ向うに立っていた、背の低い声色遣いが一人やはりこちらへ歩いて来る。彼の目のあたりへ近づいたのを見ると、どこか少年に似ていないことはない。

大きい針金の環のまわりにぐるりと何本もぶら下げたかも、

じ。かもじの中には「すき毛入り前髪立て」と書いた札も下つている。これ等のかもじはいつの間にか理髪店の棒に変わってしまう。棒の後ろにも暗のあるばかり。

55

四六

理髪店の外部。大きい窓硝子の向うには男女が何人も動いている。少年はそこへ通りかかり、ちよつと内部を覗いて見る。

56

四七

頭を刈つている男の横顔。これもしばらくたつた後、大き

い針金の環わにぶら下げた何本かのかもじもじに変わってしまった。かもじもじの中に下った札ふだが一枚。札には今度は「入れ毛」と書いてある。

57 四八

セセッション風に出来上った病院。少年はこちらから歩み寄り、石の階段を登ゆって行く、しかし戸の中へはいったと思うと、すぐにまた階段を下くだって来る。少年の左へ行のちった後、病院は静かにこちらへ近づき、とうとう玄関だけになってしまガラスどう。その硝子戸ガラスどを押しあけて外へ出て来る看護婦かんごふが一人。看護婦は玄関たたずに佇たんだまま、何か遠いものを眺めている。

膝の上に組んだ看護婦の両手。前になつた左の手には婚約の指環が一つはまつている。が、指環はおのずから急に下へ落ちてしまふ。

わずかに空を残したコンクリイトの塀。これもおのずから透明とうめいになり、鉄格子てつこうしの中に群むらつた何匹かの猿を現して見せる。それからまた塀全体は操あやつり人形にんぎようの舞台に変わってしまう。舞台はとにかく西洋じみた室内。そこに西洋人の人形が一つお怯おず怯おずあたりを窺うかがっている。覆面ふくめんをかけているのを見ると、こ

の室へ忍びこんだ盗人らしい。室の隅には金庫が一つ。

60 五一

金庫をこじあけている西洋人の人形。ただしこの人形の手足についた、細い糸も何本かははつきりと見える。……

61 五二

斜めに見た前のコンクリートの塀。塀はもう何も現していない。そこを通りすぎる少年の影。そのあとから今度は背むしの影。

前から斜めに見おろした往来。往来の上には落ち葉が一枚風にかかれてまわっている。そこへまた舞い下つて来る前よりも小さい落葉が一枚。最後に雑誌の広告らしい紙も一枚翻つて来る。紙は生憎引き裂かれていゝらしい。が、はつきりと見えるのは「生活、正月号」と云う初号活字である。

大きい常磐木の下にあるベンチ。木々の向うに見えるのは前の池の一部らしい。少年はそこへ歩み寄り、がっかりしたように腰をかける。それから涙を拭いはじめ。すると

前の背むしが一人やはりベンチへ来て腰をかける。時々風に揺れる後ろの常磐木。少年はふと背むしを見つめる。が、背むしはふり返りもしない。のみならず懐ふところから焼き芋を出し、がつがつしているように食いはじめる。

64 五五

焼き芋いもを食っている背むしの顔。

65 五六

前の常磐木ときわぎのかけにあるベンチ。背むしはやはり焼き芋を食っている。少年はやっと立ち上り、頭を垂れてどこかへ歩

いて行く。

66
五七

斜めに上から見おろしたベンチ。板を透かしたベンチの上には墓口がまぐちが一つ残っている。すると誰かの手が一つそつとその墓口をとり上げてしまう。

67
五八

前の常磐木のかげにあるベンチ。ただし今度は斜めになっている。ベンチの上には背むしが一人墓口の中をしら検べている。そのうちにいつか背むしの左右に背むしが何人も現れはじめ、

とうとうしまいにはベンチの上は背むしばかりになってしま
う。しかも彼等は同じようにそれぞれ皆熱心に墓口の中を検
べている。互に何か話し合いながら。

68

五九

写真屋の飾り窓。男女なんによの写真が何枚もそれぞれ額縁がくぶちにはいつ
て懸かかっている。が、それ等の男女の顔もいつか老人に変わつて
しまう。しかしその中にたった一枚、フロック・コオトに勲
章をつけた、鬚あごひげのある老人の半身だけは変わらない。ただそ
の顔はいつの間まにか前の背むしの顔になっている。

69

六〇

横から見た観音堂。かんのんどう少年はその下を歩いて行く。観音堂の上には三日月が一つ。みかづき

70 六一

観音堂の正面の一部。ただし扉はしまっている。その前に礼拝らいはいしている何人かの人々。少年はそこへ歩みより、こちらへ後ろを見せたまま、ちよつと観音堂を仰いで見る。それから突然こちらを向き、さつさと斜めに歩いて行ってしまふ。

71 六一

斜めに上から見おろした、大きい長方形の手水鉢。ちようすばち 柄杓がひしやく 何本も浮かんだ水には火ほかけもちらちら映っている。そこへまた映って来る、憔悴しやうすいし切った少年の顔。

72

六三

大きい石燈籠いしどうろうの下部。少年はそこに腰をおろし、両手に顔を隠して泣きはじめる。

73

六四

前の石燈籠の下部の後ろ。男が一人佇たたずんだまま、何かに耳を傾けている。

74 六五

この男の上半身。もつとも顔だけはこちらを向いていない。が、静かに振り返ったのを見ると、マスクをかけた前の男である。のみならずその顔もしばらくの後、少年の父親に変わってしまう。

75 六六

前の石燈籠の上部。石燈籠は柱を残したまま、おのずから炎ほのおになつて燃え上つてしまう。炎ほのおの下火したびになつた後、そこに開き始める菊の花が一輪。菊の花は石燈籠の笠よりも大きい。

76 六七

前の石燈籠の下部。少年は前と変りはない。そこへ帽を目深まぶかにかぶった巡査じゆんさが一人歩みより、少年の肩へ手をかける。少年は驚いて立ち上り、何か巡査と話をする。それから巡査に手を引かれたまま、静かに向うへ歩いて行くゆ。

77 六八

前の石燈籠の下部の後ろ。今度はもう誰もいない。

78 六九

前の仁王門におうもんの大提灯おおじょうちん。大提灯は次第に上へあがり、前のよなうに仲店なを見渡すようになる。ただし大提灯の下部だけは消え失うせない。

(昭和二年三月十四日)

後註

- 一 [10] は縦中横
- 二 [11] は縦中横
- 三 [12] は縦中横
- 四 [13] は縦中横

- 五 [14] は縦中横
- 六 [15] は縦中横
- 七 [16] は縦中横
- 八 [17] は縦中横
- 九 [18] は縦中横
- 一〇 [19] は縦中横
- 一一 [20] は縦中横
- 一二 [21] は縦中横
- 一三 [22] は縦中横
- 一四 [23] は縦中横
- 一五 [24] は縦中横
- 一六 [25] は縦中横
- 一七 [26] は縦中横
- 一八 [27] は縦中横
- 一九 [28] は縦中横
- 二〇 [29] は縦中横

- 二一 [30] は縦中横
- 二二 [31] は縦中横
- 二三 [32] は縦中横
- 二四 [33] は縦中横
- 二五 [34] は縦中横
- 二六 [35] は縦中横
- 二七 [36] は縦中横
- 二八 [37] は縦中横
- 二九 [38] は縦中横
- 三〇 [39] は縦中横
- 三一 [40] は縦中横
- 三二 [41] は縦中横
- 三三 [42] は縦中横
- 三四 [43] は縦中横
- 三五 [44] は縦中横
- 三六 [45] は縦中横

| | | |
|----|------|------|
| 三七 | [46] | は縦中横 |
| 三八 | [47] | は縦中横 |
| 三九 | [48] | は縦中横 |
| 四〇 | [49] | は縦中横 |
| 四一 | [50] | は縦中横 |
| 四二 | [51] | は縦中横 |
| 四三 | [52] | は縦中横 |
| 四四 | [53] | は縦中横 |
| 四五 | [54] | は縦中横 |
| 四六 | [55] | は縦中横 |
| 四七 | [56] | は縦中横 |
| 四八 | [57] | は縦中横 |
| 四九 | [58] | は縦中横 |
| 五〇 | [59] | は縦中横 |
| 五一 | [60] | は縦中横 |
| 五二 | [61] | は縦中横 |

- 五三 [62] は縦中横
五四 [63] は縦中横
五五 [64] は縦中横
五六 [65] は縦中横
五七 [66] は縦中横
五八 [67] は縦中横
五九 [68] は縦中横
六〇 [69] は縦中横
六一 [70] は縦中横
六二 [71] は縦中横
六三 [72] は縦中横
六四 [73] は縦中横
六五 [74] は縦中横
六六 [75] は縦中横
六七 [76] は縦中横
六八 [77] は縦中横

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 3 月 24 日第 1 刷発行

1993（平成 5）年 2 月 25 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 4 月 20 日公開

2004 年 3 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。